



佐々木峻教授を悼む

六月十八日、午前十一時五分、委員会の席で悲報に接しました。働き盛りの五十五歳、痛ましい限りです。長い闘病生活ではありましたが、度々復帰を果たされ、この度も容易ならざる容態であると聞かされながら、またお元気な姿を見せてくださるものと信じておりました。

先生は、昭和四十三年に広島大学大学院文学研究科博士課程を終えられて後、昭和四十六年よりお亡くなりになるまで、東雲分校、学校教育学部において、教育と研究に従事してられました。

その間、全学の広報委員として、また、教職員組合の役員として、また教室主任として誠実に仕事を遂行され、また、そのようなお忙しい生活を縫って、一年間、中国の大学で、日本語・日本文化を講じられるなど、傍目にも忙しい生活を送ってられました。

先生の堅実な学風と温厚なお人柄は、同僚、学生の敬愛するところでした。ご専門は中世の国語研究であり、お人柄を反映した堅実な学風によるお仕事の成果は、その分野における基礎的研究として高く評価され、また、先生のご講義は、多くの学生を魅了してきました。

先生を惜しむの情、切なるものがありますが、今はただ、先生の御霊の安からんことを祈念して、お別れの言葉といたします。

学校教育学部 国語教室

森田信義（もりた・のぶよし）



門秀一先生を悼む

門秀一名誉教授は九月二日朝逝去された。静かな眠りであった。哲学は知識でない、デンケン（思索）だ、門先生はいつも語っておられた。無類のカープファンであった。初優勝の昭和五十年以前、いまだ弱小であったカープを講義のなかでもたたえつづけた。ファンはフェアプレイを見にゆくのではない、試合に勝つのを見にゆくのだ、そうも言われた。スポーツはフェアプレイ、しかしそれを見るファンの心情は不条理である。その不条理に先生は、思索を向けようとした。

先生のテーマは、自由、死、偶然、愛であり、この不条理なる実存的葛藤であった。ご著書「自由の論理」、「不条理の哲学」、「愛の構造」は、先生会心の三部作であった。

先生は昭和十六年広島文理科大学をご卒業、静岡県浜松師範学校で一時期教鞭をとられたのち、昭和十八年九月広島文理科大学助手として広島大学に戻られた。爾後、昭和二十二年広島高等師範学校教授、昭和二十四年広島大学皆実分校助教授、昭和三十一年同校教授、昭和三十九年同校養部教授、昭和四十九年同総合科学部教授を歴任された。ご停年になる昭和五十三年までの三十五年は、広島大学にとって激動と受難の歴史であった。太平洋戦争、学徒動員、原爆被災、学制改革、学生運動、教養部改革から総合科学部誕生。その激動を、先生はいつも全身で受けとめられてきた。

先生は、教養科目としての哲学に心くだかれた。名講義であった。「門哲（モンテツ）」とよばれ、先輩は後輩にそれを伝えた。親が学生時に感動し、わが子に聴講をすすめた。

先生はすすんで街に出てゆかれた。市民と連帯する哲学を説かれ、みずからも種々の平和運動に献身的に活動された。昭和五十一年度中国文化賞受賞。晩年身体の不調をおして、思索の生活をあそばれていた。その先生に会えなくなるのはさびしい。享年七十九才。

総合科学部比較文化研究講座 金田 晋（かなた・すすむ）